慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	想像の死者に向けた手紙 : オーラル・ヒストリーの敗北宣言
Sub Title	The letters addressed to imaginary dead : declaration of defeat in oral history
Author	金菱, 清(Kanebishi, Kiyoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2018
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.23 (2018. 7) ,p.35- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : サバイバーの社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

想像の死者に向けた手紙
――オーラル・ヒストリーの敗北宣言――
The Letters Addressed to Imaginary Dead: Declaration of Defeat in Oral History

金菱　清

１．はじめに

本論文は、オーラル・ヒストリーの敗北宣言を受けて、ライティング・ヒストリーを展開する。ライティング・ヒストリーとは、当事者のなかですら伏せられた無意識（抑圧）に対して、そこにある以上の事実を、調査者の介在を必要としながらもそれを無効にし、当事者が自らの手で意味のある「歴史」として刻むことができる新たな実践である。

現場のサバイバーである当事者は、こんなことを話すべきではない、書くべきではないという形で感情を抑圧している場合がある。いわゆる“沈黙”状態である。それを二人称という亡き人に対して「手紙」という形で書き記してもらう。予め書かれた（written）ものがあってそれを分析するものではなく、書こうとする（writing）意思に重点を置く。ライティング・ヒストリーは、自分ではなかなか理解できずに悶々としていた感情を自分のなかで咀嚼しながらそれを何とか理解可能なものへと導いてくれる。そのことで、これまで歴史のなかで沈黙を強いられてきた問題が何であるのかを明らかにする試みである。

社会学はしばしば他者理解だという唄い文句がある。質的社会調査の前提となっているのは、たとえ周りの目から見た時に不合理なようにみえても、当事者はどこかで現象についてわかっているという点である。当人の世界において合理的な理屈で把握されていて、インタビューワーは自分の合理性の枠組みではなく、敷居を下げてそれをまるごと理解するという暗黙の前提となる方法論が質的調査論にはある。

しかし、ほんとうに「合理的な理解」を当人ができていたら、こんなに震災でサバイバーが苦しんでいないと思われる。災害での現象や亡き人への接近の仕方がすっきり理解できないからこそ懊悩しているのではないかと考えるようになった。手紙のなかで何とか言葉にしたり、あるいは逆に沈黙についての意味を知ることができるのである。いわば、沈黙の歴史である。そこでは寄り添いの技法は、逆に当事者との間に溝を生じさせてしまう。

資料中心主義で成り立ってきたいわば強者の歴史に対して、オーラル・ヒストリーは市井の弱者の社会史を描き出してきた。サバルタン的歴史と言い換えてもよい。だが、その語りの強さ（当事者性）の陰で見えてこなかったのは、語らない人々の存在である。それを手紙という手段によって辛うじて炙り出すことが可能になる。ライティング・ヒストリーは、インタビューに存在する距離を可能な限りゼロにした、文章資料主義の歴史とも口述資料主義の歴史とも異なる、第三の歴史の編纂の試みである。以下インタビュー形式でオーラル・ヒスルトリーの

金菱清「想像の死者に向けた手紙――オーラル・ヒストリーの敗北宣言――」
『三田社会学』第 23 号（2018 年 7 月）35-51 頁

敗北宣言とライティング・ヒストリーを展開してみたい。

２．敗北宣言

――これまでどれほどインタビューを行ってきたのでしょうか？

「かれこれ 20 年ほど聴き取りを重ねてきました。といっても諸先輩方に比べれば、まだひよっ子です。」

――それで今回の特集のテーマが「サバイバーの社会学」ということなのですが、語ることについて何か特権的といいますかそういう問題の立て方でいうと、文章資料に対して、口述資料として社会学のなかでは位置づけられます。そのなかにおいてインタビューはどういう役割を果たしてきたのでしょう？

「災害で言うと、誰か家族が亡くなるとご遺族という名称が与えられて、これがサバイバーとして一般名詞化されます。この時点で、個別性をはく奪される可能があります。まず、はじめにクリアにさせておいた（断っておいた）方がよいのが、先ほど 20 年ほどといいましたが、その中堅のインタビューワーとして、リアリティにせまるためにはこれまでインタビューが最善の方法だと思っていましたし、ある程度それに対する信頼性と自負みたいなものをもっていました。ところが、あるプロジェクトに関わることによって、それを撤回せざるをえない事態が生じました。いわば、インタビューというかオーラル・ヒストリーの「敗北宣言」を出しておこうと思うようになったのです。」

――えっ、いきなり敗北宣言ですか。それは予想外です。よくありがちなオーラル・ヒストリーのインタビューする側とされる者との創造的な相互作用があるような自己弁護的な便法はよくありますが、それともまた違うんですか？

「まったく違います。誤解を恐れず言えば、それはコップの中の議論であって、結局インタビューされる側によって話の導線がひかれる気がしています。」

――そうですか。まあ、方法論的な問題関心から入ってもモヤモヤするので、まずはなぜ敗北宣言を出されるにいたったのかまでの具体的な災害に向き合う経験を伺いながら、実際に直面した問題認識に再度かえって議論したいと思います。

３．亡き人への手紙の試み

――なぜ 2017 年に亡き人への手紙集（『悲愛』の本：図１）を出されたのでしょうか？

図１　2017 年『悲愛』30 編にのぼる手紙

図２　2012 年『3.11 慟哭の記録』71 人の震災の記録

「手紙の本を出す 5 年前の 2012 年に『3.11 慟哭の記録』（新曜社：図 2）を上程しました。この記録は 71 人の当事者自らが 5W1H を用いて震災の経験を詳細に書き綴る試みでした。本来これからの 5 年目の経過ということでその変化を追うことを当初から言われていましたし、それが本筋だと思いました。ところが、全員書くことも不可能だろうし、5 年の変化のなかで立ち直っている人もいれば、いまだ苦しめられている人もいてその差が大きくなっていたので、収拾をつけることができないことがすぐにわかりました。しかし、慟哭の記録のなかで見つかった死者との関係性を活かすためにはどうすればよいのかということを模索しました。」

――慟哭の記録から死者との関係性がみえてきたというのは？

「これは意外なところから出てきました。慟哭の記録では、1000 年ぶりの大災害なので記録として人類史の記録集を組みたいという意図が編集する側である私にはありました。ところが書いた当人はこちらの意図とは異なる文脈で利用していることが後からわかりました。これを聞くきっかけとなったのが、共同通信社の方からインタビューを受けて「当人が直接書くこと」と「調査者がまとめて書くこと」とどこが違うのかと問われたことです。東日本大震災という名称からして広域に渡る領域をカバーできうるはずもなく、地名も間違います。そうであるならば、当事者自らが書くことを物理的にとらざるをえなかったのです。

そして、まず本を渡した反応がこれまで研究書を手渡したものと大きく異なっていました。本を抱きかかえながら抱きしめている人もいれば、仏前に備えさせてもらいますという方もい

ました。読まれずに片隅に放置されるのが研究本の常なのに、この意外な反応が実は「死者」との関係だったのです。

どういうことかといえば、この文章を書き綴る際には一人ではなく、亡くなった家族と一緒に書いてこれが息子にできる最後の父親の仕事と仰っていたり、あるいはカウンセリングとの対比でいえば、自分が楽になることは亡き人の記憶をも無くしてしまうという危惧を当事者は感じていました。しかし、この記録に綴る試みは故人との大切な思いをそのまま保存することができて「これだけ愛している」ということを書き記すことでどこか肩の荷が少しだけ下ろすことができたのです。私はそれを痛みを解消する方向ではなく、「痛み温存法」として理論化もしました。痛みは取り除く対象ではなく、むしろ大切に保持されるものであるという意味です。これはまさに意図せざる結果です。」

――そうすると、それまでどちらかといえば死者の位置づけが排除される傾向にあったものを死者との関係性を取り入れないかぎり本来の意味で解決しない点で、この記録の試みは意図しない所で実践的な意味を含んでいたということになりますね。

「そうです。社会学をはじめとした社会科学は、死者との関係を排除することで、すっきりした理論を提供することができました。災害の分野でもある専門家は、死んだ人はもう亡くなったのだから扱わないと公言されていました。連字符社会学も生きている人を基本的に扱います。この延長線上に明らかにいた私は、今回の東日本大震災の事象に向き合う中で反省を迫られました。慰霊碑のそばにおいてある学校の机の上には、マジックインキでこういう風に書かれています。

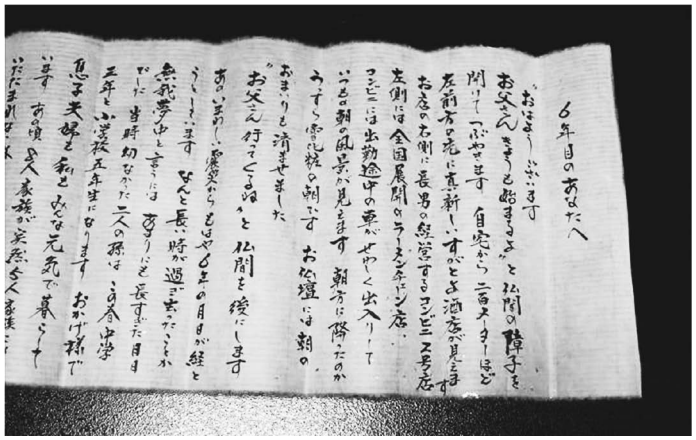
> あの日大勢の人達が津波から逃れる為、この閖上を目指して走りました。街の復興はとても大切な事です。でも沢山の人達の命がある事を忘れないでほしい。死んだら終わりですか？生き残った私達に出来る事を考えます

「これは復興政策だけでなく、我々が身を置いている社会科学に対する痛烈な批判でもあるのです。この 5 年の中でタクシー運転手の幽霊との邂逅など死者との関係性が明らかになりつつあった時期なので、当事者の人が亡き人やもの、故郷に向かって直接手紙を綴ることにしてもらいました。しかし、この手紙プロジェクトを組む時に、困ったことは、実際のところ何が出てくる（書かれてくる）のか正直なところわからないことでした。慟哭の場合は、事前にこういうトピックという形で事前の調査でわかったのですが、それを絞ることも実質上できませんでした。実はそこが今回の“敗北宣言”にも繋がってくるわけです。想像の死者に向けて書かれた手紙は本来存在しません。なぜならもうこの世にはいないので、生者だけの世界で成立したならば必要ないということになります。」

――ほう。

「手紙を受け取ったとき、拝読して正直ショックでした。本来ない世界がこれだけ豊かに描かれているのはどういうことなんだろうか。これまでの聴き取りって何なんだろうか。この手紙を読んだ時の心揺さぶられる気持ちは何なんだろう。これらの点が自分の琴線にひっかかってきました。」

４．どこまで聴き取りは日常生活を追えるのか



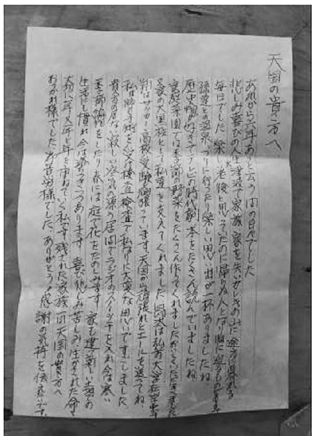


図３・４　実際に『悲愛』の手紙プロジェクトに寄せられた手

――具体的にどういう手紙の内容だったのでしょうか？

おはよう、パパ

声には出さずに天井を見る。
朝、アラームが鳴る前に目をさますようになったのは、最愛の夫であるあなたを失ってから。
私は、一気に歳をとってしまったような気がするよ。
ゆっくりスマホに手をのばしながらあなたを思うと、少しだけ、涙で目がうるむ。
毎朝そこから一日が始まる。
目がさめて、となりにあなたがいない現実を思い知る、朝が一番つらい時間。
（中略）

平日だったので、娘は会社に行かせていた。孤独だ、と思った。
玄関に立ったまま頭の中が白く霞んだ。そうしたら、ふいに、口から笑い声が出た。仏壇の前に行き、座りこんでなぜだかしばらく笑いが止まらなくなった。
まったく可笑しくなんてないし、笑いたくなんてないのに。涙を流しながら、自分で止められない笑いがとても怖かった。

（『悲愛――あの日のあなたへ手紙をつづる』より一部抜粋）

「この手紙を読んだ時、愕然としました。そして不安になりました。これまで 20 年ほど聴き取りの手段を用いて対象に迫ってきましたが、たとえば冒頭にあるような本人が最も辛いシーンはどのようにすれば聴き取ることができるのだろうかと立ち止まって考えざるをえませんでした。

つまり亡くなった夫の不在の辛さそのものではなく、日常生活に深くしかもあまりにもそこに溶け込んでしまい当たり前に送ってきた生活世界を営めなくなる。眠りから覚めると震災前の当たり前の日常がほんの一瞬だけ戻ってきます。ところが、すぐに壊された日常が顔を覗かせる朝の辛さを伝えてくれています。それが毎日ご遺族が抱えている向き合い方だったのです。しかし、たとえそれについて聴き取りで話を伺ったとしてもひょっとするとスルーしてしまう事象が書かれてあるのです。

後半は、娘を送りだしてひとりぽつんと孤独になり、その辛さがある閾値を超してしまうと、笑いがふと込み上げて、しかも声が口をついて当人を驚かせるシーンです。これら聴き取りでは表出しえない震災と日常がリアルに「亡き人（想像上の死者）への手紙」を通じて辛うじて掬い取ることができることに気づかされたのです。」

――他にショックをおぼえたことはありますか？

「そうですね。聴き取りはいくら双方向の創造的コミュニケーションの産物だという自己方便はなりたったとしても、いかに聴き取る側のアジェンダセッティングに暗黙の裡に絡めとられるのかということが見えてきました。光を当てる分だけ、その人がほんとうに言いたいことや大切なことは影の部分となって隠れているのではないかと不安を覚えました。たとえ長年聴き取ったり会話をしても見えてこない大切な世界がこれだけあるのだということを思い知らされましたね。逆に言えば、手紙を通してみる世界は、何が大切なのかということを瞬時に把握する手段としては調査方法としては適しているのかもしれないことが見えてきました。」

――大切なことというのはどうしてわかるのですか？

「手紙の中身というのは、私的なことばかりで、他の人からみれば必要なことは書いてあり

ません。しかし、この手紙は生きている人に書いたものではないので、震災以降突然目の前から姿を消してしまった大切なかけがえのない家族に対する亡き人への想いなのです。それはある種その残された遺族が伝えたくてしかないことや聞きたくて仕方のないことが凝縮された形で結晶化された内容なのです。それに近づけていない問題意識はたとえ何を切り取ったとしても「表面的」なものになる可能性がでてきます。学会でも災害のことを報告していますが、この水準からみれば、ほとんどが見えやすいところだけを客観的に都合よく切り取っている科学を装った物語です。」

５．強い当事者性の氷解

――そうなると、ある種これまでの調査者に対する当事者の苛立ちもみえてくるのではないでしょうか？

「もちろん私も含めてですが、研究者、マスコミ、映像、記録でも、この奥深さで震災を日常生活に溶け込んだものとして描けていないことになります。すると、当然被災者や遺族の中から、「あなたに言ってもわからないし、理解されない」という反応が暗黙の裡に含んでいる可能性は否定できません。するとわかりやすい他者に了解しやすいものだけが巷に溢れて共有されてしまうことになります。」

――でも、インタビューでもその苛立ちみたいなものは掬えるのではないでしょうか？あるいは我々がするインタビューと手紙とは質的に異なるところがあるのでしょうか？

「インタビューなどは、第三者へ言葉で語られるのですが、亡き人への手紙は二人称の話者へ直接言葉を投げかけられます。手紙は昔からあるシンプルな手段なのですが、手紙の特色としては、ある作家は、「手紙。あるいは言葉。書くということ。物語を書いているとき、頭の中と手の先が乖離していて、ほとんど無意識で綴った言葉が、物語を牽引していったり、行き詰っていた物語に道を示してくれる。自分の意思では手が届かない心の奥底からふいに姿をあらわす、言葉にはそんな力があるのかもしれない」（井上荒野「綴られる愛人」より）と書いていたり、社会学者の宮原浩二郎氏は、思いやりのある手紙には、「相手に向かう同情的な共感だけでなく、より理知的な想像力や思慮分別を含んでいる」（宮原 2000：12）と記しています。これら手紙の効用は、研究者の方向性でまとめられるのではなく、モヤモヤしていた感情の渦を一つ一つ当事者自身が吟味しながら言葉を選んでいく作業を含んでいることに特徴があります。」

――つまり、当人でもあまり気づかないものが手紙を通して表現されるということになりますか？

「話された・書かれたことは、どこか「礼儀正しい＝上品な」言葉であるかもしれません。まず話すことは私（金菱）も被災地の幽霊について一昨年以来たくさんのマスコミのインタビューを受けてわかったのですが、相手の意図を察してこういえば納得してもらえたり、こういえば首尾一貫した主張になるのではないかということを薄っすら考えながら話すことがありました。つまりこれはどこか答える側は良い意味なのですが、どこか虚勢を張った嘘を含んでいることもひょっとするとあるのではないでしょうか。

あるいは、今回手紙に参加してくれたあるクリスチャンは毎日日記を書いています。手紙では引っ越してきたばかりで大地震に遭遇し家族がその後離散したことについて、なぜ神はこのような試練を私に課すのかということが訥々と書かれています。つまり、彼の見えない相手は神様です。

この手紙についての差異について、彼は全く違ったものであると告白してくれています。彼曰く日記はどこか嘘（虚勢）が含まれていて、ここでいう意味での嘘はどこか礼儀正しい言葉で書き綴られているけども、神様に語り掛けられた手紙の場合は、何で自分はこのような目に遭ったのかという疑問などを含めて赤裸々に綴った言葉を書いたときはものすごく辛く涙を流しながら書いたそうです。それはある種嘘をついてもそれは、相手が一切何も答えてくれない分、その言葉が反射鏡のように全て書いた当事者に返ってくるために自分に対して正直ならざるをえなかったというのです。少しばかり覗いてみましょう。」

> 頭では理解しようとしても、どうしても心や霊では理解できないのです。あるいは、「あなた（神）」の存在を認めたとしても、「あなた」を愛するのではなく、「あなた」を憎んでしまうのです。そんな私にある人は言うかもしれません。「あなたの信仰はそんなものだったのですか？」とか、あるいは、「私はあなたよりもっと苦しいことを経験しましたけど、それを信仰で乗り越えて来ました」とか。そんなことは私にはどうでもいいのです。他人の信仰や他人の不幸自慢はもうたくさんです。これは私と「あなた」の関係性の問題なのですから。
>
> あれから 7 年が経とうとしています。今も私の心の中には「あなた」に対する疑いと怒りが渦巻いています。そのことを「あなた」は知ってか知らずか、私の気持ちをもて遊ぶかのように、私をいろいろなところに導くのです。
>
> （前掲書より一部抜粋）

――遠藤周作のまさに沈黙ですね。尋ねるけどもいつも神は黙っておられる。正直さですか…。

「正直にならないといけない分だけものすごく辛い作業を伴います。そこには、雄弁な当事者はある種存在しません。それは実際存在していればよいのですが、今は姿を見せない想像の

死者です。虚勢を張れば楽なのでしょうが、それはすべてそっくりそのまま自分に跳ね返ってきます。なぜなら書き綴る相手はもう存在しないし、決して口をついて答えてくれることはないからです。インタビューのように第三者に語りっぱなしなるのとは水準が異なってくると言えます。つまり、私たちが前提としてきた「当事者」の考え方に力点を置くような質的手法ではなくなってきます。したがって、強いて言えば、サバイバー単体ではなく、残された遺族とその亡き家族を含む関係性にまで射程に収めないとこのサバイバーの意味が表面上のことになりかねないとも言えます。」

――それは意外ですね。「当事者主権」という言葉があるように、大きな社会の流れとしてはさまざまな社会的弱者の“当事者性”を重んじてそこから論をたてることが基本だと思っていましたが、それをある種突き破るという発想なのですね。

「そうなんです。なぜなら、手紙を読んでわかるのですが、そこに描き出される当事者は、とても弱々しくある意味錯綜しています。首尾一貫していない。それは亡き人や大切なものの前で初めて表れる自己の位置づけなのです。私たちインタビューワーはどこかで当事者はその出来事についてすべて知っていることを前提にしています。だからこそ当事者主権が意味を持ちえます。ところが手紙を通して見えてくるのは、当事者自身もまだまだ震災のことについて明確な回答をもっているようには思えないということです。暗中模索といった感じがするのです。

もちろん行為レベルではその時何をしたのか、何を考えてきたのか、などについてインタビューを重ねることができます。しかし、あの日突然何の挨拶や言葉も交わさないままいってしまったために、そこには後悔や恨み節その他さまざまな感情が入り乱れる表出の場となっているからなのです。したがって、手紙を通じて見えるのは「当事者性」そのものの氷解なのです。」

６．手紙を書けないということ

――しかし、少し穿った見方をすれば、そもそも手紙を書ける人は書けるという意味で強いし、当事者性が十二分に備わっているのではないかと思えてくるのですが。

「もちろん、手紙を書くこと自体辛い作業であるので、書ける人というのは強い当事者であるのかもしれませんが、実はこの手紙を依頼する過程で書けなかったり、書くことを躊躇ってしまった方がいます。」

――そうか、この手紙の本は書けた人が載っているけれども、書けない人も想定していることなのですね。

「なぜ当事者性が揺らぐのかという話にも通底していきます。最終的には手紙を書いてくれたのですが、逡巡しながら期限ぎりぎりまで待って書けなかった人にお話を聞きに行くと次のようなことがわかってきました。娘さんを石巻の日和幼稚園で亡くされたお母さんは、実はこの手紙のプロジェクトに先立って、あるお寺さんの企画で毎年手紙を書いて 3.11 にお焚き上げをして言葉を天国に送ることに参加されていたそうです。最初の 1・2 年のうちは愛娘への想いをなんとか言葉を送り届けたい一心で書き綴っていました。ところが、4・5 年経つうちに言葉を紡ぐことができなくなっていきます。」

――逆ではなく？　つまり、最初の 1・2 年が苦しくてあとは心が休まって書きやすくなるのではなく…。

「そうなんです。普通はそうなるはずなのですが、逆の場合があるのです。娘さんは亡くなられたときは 6 歳の幼稚園児です。ですが、たとえばそこから 2016 年を迎えると 5 歳齢を重ねることになりますので、11 歳ということになり、中学生一歩手前まで成長することになります。すると、基本的に娘さんに母親としての想いを愛娘に伝えたいと思うので辛い部分はありますが、毎年参加します。最初の 1・2 年はその当時の愛娘に対して素直に想っている言葉を綴ります。ところが 11 歳の娘になったであろう齢には、漢字が普通に読めている時期になります。すると手紙を当時のまま“ひらがな”で書いていいのか、“漢字”で書いていいのかそこから迷い始めて苦しくなって筆を進めることができなくなったというのです。」

――災害で止まった時間と進んだであろう時間が決して交わることなくそのことが重しになって遺族に圧し掛かってきているということがいえるでしょうか。

「そうです。誰しも毎年誕生日が巡ってきます。それは亡くなった人でも例外ではありません。とくにお子さんを亡くされた遺族は、その歳になったであろう蠟燭の本数をたてたケーキとプレゼントを用意します。ところが、趣味趣向は亡くなった時点ではわかるのですが、歳月が経つにしたがって、わからなくなって、本当にこのプレゼントでいいのかと逡巡しているのです。

このお母さんも、12 歳で 4 月から中学生というところで、中学の制服の採寸をしたいけれども、実際の身体に合わせて背格好を測ることも叶わないので苦しんでおられました。その意味で、この手紙の書き手は自ら手を挙げて書こうとしたというよりは、悩みながら言葉を綴る作業を試みたということができます

いわば二重の時間を生きているということが傍目からはなかなか見えてきません。彼女の場合、日和幼稚園の裁判の当事者として、高台にある幼稚園にいた愛娘がなぜか津波の方向に向かってバスの送迎を行って、津波火災によって亡くなった痛ましい事件の原告人でもありまし

た。マスコミに登場する彼女は、いずれも裁判で闘いインタビューにも物怖じせずに話す強い女性でした。ところが、手紙で愛娘に向き合う彼女はとても弱々しく感じられます。それが次の手紙の一部です。」

瓦礫の中から変わり果てた愛梨を見つけることが出来、真っ黒こげで赤ちゃん位の大きさになっていて表情すら読み取れない位に変わり果ててはいたけど、愛梨だとママもパパもわかったよ。

本当はね、ママもパパも愛梨を思いっきり抱きしめてあげたかったけど、抱きしめたら愛梨が壊れてしまうから抱きしめてあげる事が出来なかったの…。

抱きしめてあげる事すら出来ずにごめんね…。本当はギュ～と抱きしめて「頑張ったね」って言ってあげたかった…。

…せめて、愛梨を抱きしめてあげながら一緒に旅立ってあげたかった…と思っています。

（前掲書より一部抜粋）

「彼女の本心は、愛する愛娘と一緒に逝ってあげたいという思いですが、それが叶わない現実があってそういう葛藤にもがき苦しんでいる姿です。もうひとりの事例は、やはり今回手紙を書いてもらった女性で妹を今回の津波で亡くしています。しかし彼女はいつもニコニコしていて 6 年経って、地域の課題に対して、前を向いてまちづくりに奔走している時期でもありました。そのような時期に手紙の依頼をしたのですが、彼女はこの依頼に対して狼狽したといいます。もちろん、弱い自分ではなく、涙も枯れる悲しみを経験して自分自身で強いと思っていました。悲しいとか大変だとかは当たり前の感覚で、自分だけが辛いということを公言するのも嫌だという思いと、でもそれでも自分のような辛い思いをするのは嫌だと手紙を書こうと思った胸の内を教えてくれました。

つまり彼女のなかでは、6 年経ち、悲しみの現実に蓋をしていたことに気づき、もし手紙を書いたら、あの日の悲しみに戻って前に進めないかもしれない不安に苛まれていたのです。自ら進んで手紙という形で筆をとろうと思うことはないし、そのような記録は震災史として残らないということになりますね。それはあたかもチェルノブイリ原発の石棺のように、当事者が感情に蓋を固く閉ざしているために表に出されることはないといえます。その彼女は次のような手紙を綴った。」

いっくへ。

まさか、こんな形でアナタに手紙を書くなんて、あの頃は思ってもいなかったね。

もうすぐ 6 年か…

実は、いまだにアナタがもう帰ってこないってことが信じられないよ…

あの頃、毎日他愛もないことを話して 2 人で笑ってたね。

一緒に買い物行ったり、映画観たり、旅行にも行ったし、2 人で飲みに行ったり、楽しかったね。まさか、こんな事になるなんてね…

最近、アナタの同級生や友だちが結婚したり、出産したという話を聞くと、嬉しくて胸が詰まってしまう。ついついアナタと重ねてしまってね…

アナタはどんな人と結婚したんだろう。アナタの子どもはどんなに可愛いかったろう。と、途切れてしまったアナタの将来を思ってしまいます。

アナタは私達の兄妹の中で、一番遅くに産まれて、一番早くに逝ってしまうんだもの。順番が逆でしょ！

（前掲書より一部抜粋）

――そうなると、震災のようないわゆるサバイバーによるフォーマルな記録は、書きたい人ばかり、積極的に残したい人ばかりの記録ということになりますか？　書けない理由には抑圧的な意識が働くことになりますね。

「彼女はこれまでのマスコミなどからのインタビューを受けた経験を振り返りながら、「ほとんどインタビューで質問されるのは、どういう風に亡くなったか実況的な説明ぐらい」と冷やかして言っています。「その人に対してどう思っていたのかは、それこそ感情に蓋をしめていたくらいだから、いう機会もないし、いうべきじゃないと思っているしいえない」という形で、答えています。ここから言えることは、本人は辛い体験を経験しても、記録に残るような歴史的経験はむろん、本人の意識するからも抹消される傾向を強くもっていることがわかってきます。その結果、表層的な歴史的資料の記録のみが残り、それを史実として固定化される危険性もここから垣間見えてきます。

語りにくいことについて、有末賢氏は、自信の負の感情と深く結びついて、もう一段先に、「語りにくさ」は語りにくいからこそ、人生を支えていて、語られることだけを見るのではなく、歯を食いしばって、言葉にならないことを想像することによって、残された遺族が辛うじて生きていくのであるという含蓄のある言葉を残しています（有末 2013）。私たちの取り組みはそこに今一度踏み込んで焦点を当てる試みだったのだと思います。」

――それをあぶりだす流れが手紙だということになるのですね。

「手紙はその人に絞って感情を出したりぶつけたりするわかりやすい手段だという表現する書き手の方もいらっしゃいました。そして「やられた感がある。7 回忌に早くても遅くても駄

目だった。書いていてよいタイミングだなって思った」と回顧する人から考えると、ある程度の時間をおいてそれが一番高められるタイミングをみはからって行う必要も見えてきます。」

――手紙の中身はこれこれを書いてという形で何か指示されたのですか？

「それがまったく指示していないのです。正直何が出てきてそれを本に集約することができるのか全体の把握ができなかったのでまとめるうえで不安でした。内容を指示できなかったのは、亡き人とそのご遺族は個別で私的な関係なわけですから、予め調べようがありません。もっとも何十年付き合っていて関係ができあがっていれば別ですが。つまり、ここではある特徴的な調査の方法論が浮かび上がってきます。というのも、従来の歴史資料にもとづく文章資料中心主義では、調査者の不介入によって、できるだけ客観的な史実にもとづく歴史を目指し、内容はといえば、口述記録などのオーラル・ヒストリーでは、かなり踏み込んで、当事者の主観的な世界観を明示していきます。その意味では、調査内容への介入を通して調査がなされます。」

――考えてみると、それが量的な調査に対する大きな違いでもあったし、資料主義的な歴史とも異なっていますね。

「そうなんです。手紙での方法は、振り返ってみると、抑圧していた感情があって、その抑圧の蓋を解除するためには、調査者の介在を不可欠とします。ですが、内容自体は調査者として何が出てくるのか一切わかりませんので、調査者による調査内容への不介入を結果として選ぶことになります。三人称の介在を排除し、あなたへという形で括弧つきの二人称と自己との対話という形式になります。その人の亡き人への世界観を表現していきます。」

――すると、この手紙の内容を聞いていると、私たち、現場に「寄り添う」とか、震災の場合であれば被災者に「寄り添う」というキーワードがあると思いますが、それとも少し違うよう気がしてきました。

「なので、「寄り添う」という言葉を私は最近使いません。手紙を見てみると温いというか甘いということがわかってきます。寄り添うという生易しい言葉では回収しきれない言葉がそこにはあります。それはなぜかというと、第三者に対する言葉ではなく、手紙のなかであなたへというかたちで呼びかけられているために、たとえ寄り添うとしてもそれは無理だとすぐにわかります。相手になったり、書いている本人になって読んでみたり不思議な感覚に陥ります。それはちょうど弱々しい当事者そのものになってしまうということがいえるかもしれなくて、そこからは寄り添うという側にいる感覚は脱却されることになります。」

――それは興味深いですね。それは言葉の持ち方ではなく、そういう感覚になるということですね。

「それはこういう風にも考えられるかもしれません。死別を考える時、人が悲しいと思うのはなぜかということを考えた場合、悲しいという感情があるという一般的には理解されがちです。しかし、日本思想史の子安宣邦氏は、本居宣長論を踏まえ、人の死が悲しいのは、私たちが人間の感情経験からなる世界に織り込まれるからで、織り込まれていない場合には、人の死の悲しさも感じることすらないと考える。もののあわれの知ることは、人間の感情経験の世界に根差した人の心のあり方をいう（子安 2005）ともおっしゃっています。だからこそ、地球の裏側で人が亡くなったとしても悲しむことはないのでしょう。

たとえ私信の手紙だとしても、それがかえって感情経験の世界への織り込まれ方を提示していて、まるで二人称である亡き人になって言葉を受け取り、その人に感情移入（感受経験の共有）することにつながっていることを示しているのではないでしょうか。その意味で、やはり、「寄り添う」立場の境界と強い当事者性の氷解がここで起こっているのだと言わざるをえません。なので通常オーラル・ヒストリーが想定しているような「寄り添い」や「相互作用」「創造的関係」はここでは成立しないということになります。

なぜなら、これらは、インタビューワーと話者が一定程度の距離（まわい）をとったときに成立する言葉だからです。したがって、距離がゼロになれば、そもそも関係なんかは作れるはずはありません。個別的でごく私的な感情は、インタビューや記録では災害に関係のないものとして省かれる傾向を強く持ちます。しかし、この省かれた言葉の端々を繋ぎ合わせて、最も愛していたものに贈る言葉は、災害によって断ち切られたつながりを強く想わしめる所業ではないかと思われます。当事者たちが手紙に託した言葉を介して、震災の実相ははじめて日常生活に溶け込んだリアルさを伴ってたちあがってきます。私たちは、ただその言葉を透かしてのみ、感じることができるのでしょう。」

7．ライティング・ヒストリーの展開

――だいぶ聞き込んできましたが、今回の手紙をまとめることで見えてきたことをサバイバーの社会学に絡めて考えてみるとどのようなことが言えそうでしょうか？

「私は、それを『ライティング・ヒストリー』と呼んでいます。ライティング・ヒストリーは、サバイバーである当事者のなかですら伏せられた無意識に対して、そこにある以上の事実を、調査者の介在を必要としながらもそれを無効にし、当事者自身が自らの手で意味のある「歴史」として刻むことができる新たな実践です。

いくつか補足的な説明をしておきますと、当事者は、こんなこと話すべきではない書くべき

ではないという形で感情を抑圧している場合があります。それを二人称という亡き人に対して手紙という形で書き記してもらいます。したがって、予め書かれたものがあってそれを分析するといった書かれた（written）文章資料主義的なものではなく、書こうとする（writing）意思に重点を置いています。前者の場合やオーラル・ヒストリーでは強い意味で実証できるということでコインの裏表の関係にあります。それに対して、ライティング・ヒストリーは、自分でわけのわからないぐちゃぐちゃしていた感情を自分のなかで咀嚼しながらなんとかそれを理解可能なものへと導いてくれます。」

――つまり、他者の理解ではないと？

「そうです。最近出された岸・石岡・丸山編の『質的社会調査の方法』（有斐閣ストゥディア）は副タイトルにずばり「他者の合理性の理解社会学」と謳っています。このように、質的社会調査には、当事者はどこかで現象についてわかっていて、たとえ周りの目から見た時に不合理なようにみえても、当人の世界においては合理的な理屈で把握されていてインタビューワーである研究者は自分の合理性の枠組みではなく、敷居を下げてそれを理解するという暗黙の前提があります。私は少しここに疑問を持ちたいのです。

というのも、ほんとうに合理的な理解が当人ができていたら、こんなにサバイバーである遺族の方が苦しんでいないと思うのです。災害での現象や亡き人への接近の仕方がすっきり理解できないからこそ懊悩しているのではないかと考えるようになりました。もちろん、当人に聴き取りをすれば、その当時の行動や気持ちを吐露してくれます。でもそのことと本人が心底状況を呑み込んで理解していることとは水準が異なってくると思っています。その様子が、手紙を拝読するとよくよくわかってくるし、何とか言葉にしたり、あるいは逆に沈黙についての意味を知ることができます。」

――すると「沈黙の歴史」ですね。

「いいネーミングですね。沈黙の歴史は、こういう位置づけになります。資料中心主義で成り立ってきたいわば強者の歴史に対して、オーラル・ヒストリーは市井の弱者の社会史を描き出してきました。サバルタン的歴史と言い換えてもいいです。ですが、その語りの強さ（当事者性）の陰で隠されていたのは、語らない人々の存在です。それを手紙という手段によって辛うじて炙り出すことが可能になるのではないかということです。したがって、ここでの歴史とは（語ることができなかった弱さを伴った）括弧つきの歴史だということが言えます。その意味で、文章資料主義の歴史でも口述資料主義の歴史でも異なる第三極のサバイバーによる歴史ではないかとみています。」

――ここでの強さや弱さとは何でしょう？

「答えを知っているのが強さです。でも当事者は答えなんてもっていません。石戸諭氏は、この答えを知っていると意味づけた当事者の言葉からは「揺らぎ」が削ぎ落され、ひとつの権力として必要に強化されてしまう問題を指摘していますね（石戸 2017）。揺らぎそのものを捉える手法というものがもう少し手法として開発されてもいいのではないでしょうか。」

――確か、10 年前のある学会（関西社会学会）のテーマも「オーラル・ヒストリーと歴史」ということでシンポジウムと特集が組まれていましたが。

「そうです。そのなかで、歴史的資料の分析とオーラル・ヒストリーとを組み合わせた研究が、それまでの歴史研究に対して、社会に生きた経験の次元を付け加えたことに積極的な意味を見出すことを宣言しています（山田・落合 2008）。そして倉石一郎氏などは、口述の魅力について、「紙の世界の向こうを張ろうとする〈声〉」を聴くという言葉を用いながら、より深い位置づけとして資料中心主義における歴史に対する口述資料の優位性を説いています。しかし、10 年という単位の時間が経って、オーラル・ヒストリーの位置づけもだいぶ変化してきたのかもしれません。あえて名付ければ、「声の世界の向こうに停滞する沈黙」に対してどのようなアプローチが可能なのかということが問われ始めているのだと思います。その試みの一つがライティング・ヒストリーの展開だったということになります。」

――どうもありがとうございます。

付記

今回いわゆる論文調ではなく、インタビュー形式で書かせてもらいました。インタビューで深めていくことを生業としてやってきた研究者としてそれを糧としながらもそれではないところに違いがあることを今回あえてインタビュー形式の中に盛り込ませていただきました。ご笑覧いただければ幸甚です。また『フォーラム現代社会学』17 号 : 2018 年の原稿に加筆修正したものでもあることを断っておきます。

【文献】

有末賢, 2013, 「語りにくいこと――自死遺族たちの声」『日本オーラル・ヒストリー研究』9: 36-46.
金菱清編, 2012, 『3.11 慟哭の記録――71 人が体感した大津波・原発・巨大地震』新曜社.
金菱清編, 2017, 『悲愛――あの日のあなたへ手紙を綴る』新曜社.

岸政彦・石岡丈昇・丸山里美, 2016, 『質的社会調査の方法――他者の合理性の理解社会学』有斐閣ストゥディア.
倉石一郎, 2008, 「地方教育史研究におけるインタビューの可能性――紙の世界の向こうを張ろうとする〈声〉をきく」関西社会学会編『フォーラム現代社会学』7: 72-83.
子安宣邦, 2005, 『本居宣長とは誰か』平凡社新書.
石戸諭, 2017, 「死者と対話する人たち」『リスクと生きる、死者と生きる』亜紀書房、105-72.
宮原浩二郎, 2000, 「思いやりのある手紙」大村英昭編『臨床社会学を学ぶ人のために』世界思想社、3-24.
山田富秋・落合恵美子, 2008, 「はじめに――シンポジウム「オーラル・ヒストリーと歴史」へのまえがきとして」関西社会学会編『フォーラム現代社会学』7: 45-8.

（かねびし　きよし　東北学院大学教養学部）